

Title	トロイラスとボエチウス
Author(s)	後藤, 秀子
Citation	Osaka Literary Review. 14 P.1-P.13
Issue Date	1975-12-15
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25676
DOI	10.18910/25676
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

トロイラスとボエチウス

後 藤 秀 子

I.

「トロイラスとクリセイデ」(*Troilus and Criseyde*)が、「カンタベリー物語」に次いで、チョーサーの代表作であることは、誰しもが認めるところである。また、未完に終わった後者に対し、「トロイラス」は、8,000行という、かなりの長さの完成した作品である。この作品に対して、これまで多くの高い評価がなされてきた。Kittredgeなどは、この作品が、最初の近代小説、心理小説であるとさえ言っている。(1)

しかし同時に、この詩の本文と、最後の、トロイラスの死と昇天を述べ、読者に地上の愛を捨て、心を神に向けよ、と呼びかける、エピローグの部分とのトーンの違いが、様々の賛否両論を巻きおこしてきたことも、また事実である。(2) 賛否いずれにせよ、クリセイデとパンダルスという、魅力溢れる人物の活躍する、人間的な恋物語が語られた後の、宗教的な色あいの濃いエピローグには、異和感を覚えるのを否めないであろう。

この問題点を、ここでは、「トロイラス」に大きな影響を与えたと考えられているボエチウス(Boethius)の、「哲学の慰め」(*De Consolatione Philosophiae*)と照らしながら考えていきたいと思う。(3)

II.

チョーサーの詩作活動は、フランス期、イタリア期、イギリス期の3期に分けることができる。さらにKittredgeの指摘によれば、フランス期とイタリア期との間に、詩作活動のない過渡期(the Period of Transition)があったと考えられる。(4) この時期は、チョーサーが、初めて、イタリ

トロイラスとボエチウス

アを訪れた1373年から、「トロイラス」や「騎士の物語」が書かれ、イタリア期の始まりとみなされる1380年(あるいは1382年)までの、およそ10年間に及ぶものである。この期間に、チャーサーは、Ovid, Virgil, Statius といったラテン古典や、当時のイタリア作家たち、Boccaccio, Petrarch, Dante らの作品を読みあさったと推定されている。そしてまた、当時の文化人の必読書であった、ボエチウスの「哲学の慰め」もまたこの時期の愛読書であったことだろう。

イタリア期に入って、チャーサーは、こうした読書から得たものを自らの作品の中に生かしていった。この期に書かれた主な作品は、「騎士の物語」、「トロイラスとクリセイデ」、「善女列伝」(*Legend of Good Women*)であり、翻訳としては「哲学の慰め」がある。そして、「騎士の物語」と「トロイラス」とに、顕著に「哲学の慰め」の影響を見ることができる。

ここで、あらためて、「トロイラス」に見られるボエチウスの影響を調べてみよう。

まず第1に、チャーサーは、このトロイラスの物語を「悲劇」としてみなしている。それは以下の詩行からも明らかである。

The double sorwe of Troilus to tellen,
(I 1)

Go, litel book, go litel myn tregedie,
(V 1786)

「哲学の慰め」において、ボエチウスは、悲劇の定義を次のように下している。(5)

Tragedie is to seyn, a ditee of a prosperitee for a tyme,
that endeth in wrecchednesse. (II Prose II, 51-52)

これは、執政官 (Consul) という栄誉ある地位からおとしめられ、今や獄につながれ、死を待つ身となったボエチウスの悲劇である。そして、これはまた、まさに、クリセイデとの愛の幸福の絶頂から、まさかさまに、別離、裏切りという悲しみのどん底につき落とされるトロイラスの悲劇の

パターンでもある。

ポエチウスは、彼にこのような悲劇をもたらした運命の女神の気まぐれに不満を訴えるが、同様にトロイラスの悲劇もまた、運命の女神によってもたらされたものである。運命の逆流を告げる Book IV の Proem において、チャーサーは、次のように運命の女神の気まぐれを訴えている。

But al to litel, weylaway the whyle,
 Lasteth swich loye, y-thonked be Fortune!
 That semeth trewest, whan she wol bygyle,
 And can to foles so hir song entune,
 That she hem hent and blent, traytour comune;
 And whan a wight is from hir wheel y-throwe,
 Than laugheth she, and maketh him the mowe.

From Troilus she gan hir brighte face
 Away to wrythe, and took of him non hede,
 But caste him clene oute of his lady grace,
 And on hir wheel she sette up Diomed;

(IV 1-11)

ポエチウスは、現在自分の置かれている悲劇の状態を嘆き、運命の気まぐれを恨んでいるのであるが、哲学の女神との対話によって、運命、愛、神の摂理、人間の自由意志、こういった問題について、より深い思索を重ね開眼していく。

では「トロイラス」の中の3人の主要人物、トロイラス、クリセイデ、パンダルスは、運命に対し、どんな態度で臨んでいるのだろうか。

まず、クリセイデはどうか。運命の流れに押し流されながら、彼女は運命について考えようとも、ましてや、抗しようともしない。彼女は常に次善 (second best) を探そうとするのである。捕虜交換で、彼女がギリシア陣営に行くことが議会できまった時、彼女はその決議に反対し、トロイに留まり、トロイラスのもとを離れないようにする方法を考えてみようともしなかった。彼女はそれを、止むを得ないこととして諦め、一たんギリ

シア方へ行ってからトロイへ帰ってくる方法を見つけようとするのである。そしてギリシア人のディオミーデに求愛された時、トロイラスへの忠誠を守り抜こうとはせず、トロイラスを裏切ることになりはするが、ともかく、ディオミーデに誠をつくそうと、決心するのである。

But sin I see there is no better way,
And that to late is now for me to rewe,
To Diomedes algate I wol be trewe.

(V 1069-1071)

この言葉は、彼女の運命に対する考え方を如実に表わしている。彼女は、自らが押し流されている運命を直視することなく、眼前の現実、いかに対処するかを考えるだけである。

次にパンダルスはどうか。彼はその幅広い経験から、人生の両面を知っている。また、運命のうつろいやすさも知っている。彼はトロイラスへのよい助言者である。その姿はちょうど、ポエチウスに対する哲学の女神を思わせる。

クリセイデへの思いで、病の床に臥しているトロイラスのところへ彼は現われ、一体どうしたことかとたずねる。

Bi-wayling in his chambre thus alone,
A freend of his, that called was Pandare,
Com ones in unwar, and herde him grone,
And sey his freend in swich distresse and care:
'Allas!' quod he, 'who causeth al this fare ?

(I547-551)

それは、ちょうど、牢の中で、嘆き、不満を訴えているポエチウスの前に哲学の女神が現われるのを思い起こさせる。

Tho com she ner, and sette hir doun up-on the uttereste corner of my bed; and she biholding my chere, that was cast to the erthe, hevvy and grevous of wepinge, compleinede, with thisse wordes that I shal seyen,

the perturbacioun of my thought.

(I Prose I, 59-63)

そしてパンダルスは、トロイラスの苦悩のわけを問い正すが、彼は押し黙って答えない。ついにパンダルスは激しい口調で言う。

And cryde 'a-wake' ful wonderly and sharpe;
'What? slomberstow as in a lytargye?
Or artow lyk an asse to the harpe,
That hereth soun, whan men the strenges plye,
But in his minde of that no melodye
May sinken, him to glade, for that he
So dul is of his bestialitee?'

(I 729-735)

ボエチウスに対する哲学の女神は次のように言う。

Knowest thou me nat? Why art thou stille? Is it for shame or for
astoning? It were me lever that it were for shame; but it semeth me
that astoning hath oppressed thee.

(I Prose II, 8-11)

he is fallen into a litargie, whiche that is a comune sykenes to hertes
that ben deceived.

(I Prose II, 14-15)

'Felestow,' quod she, 'thise things. and entren they aught in thy corage?
Artow lyke an asse to the harpe? why wepestow, why spillestow teres?
Yif thou abydest after help of thy leche, thee bihoveth discovere thy
wounde.'

(I Prose IV, 1-4)

自分をこのような苦しみに会わせているのは、他ならぬ運命であると、不満を訴えるトロイラスを、パンダルスは次のように慰める。

And yet thou hast this comfort, lo, pardee!
That, as hir Ioyes moten over-goon,
So mote hir sorwes Passen everichoon.

For if hir wheel stinte any-thing to torne,
Than cessed she Fortune anon to be:

(I 845-849)

これは、ちょうど、哲学の女神がボエチウスを慰めるのと同じである。

For if thou therfor wenest thy-self nat weleful, for thinges that tho
semeden ioyful ben passed, ther nis nat why thou sholdest wene thy-self
a wrecche; for thinges that semen now sorye passen also.

(II Prose III, 52-54)

O thou fool of alle mortal fooles, if Fortune bigan to dwelle stable, she
cesede thanne to ben Fortune!

(II Prose I, 82-84)

パンダルスは、持ち前の機知と策略で、うまくトロイラスとクリセイデの仲をとり持ち、2人の恋を成就させる。幸福の絶頂にあるトロイラスに彼は次のように警句めいた言葉を告げる。

For of fortunes sharp adversitee
The worst kinde of infortune is this,
A man to have ben in prosperitee,
And it remembren, whan it passed is.

(III 1625-1628)

もちろん、至福にひたっているトロイラスにとっては、柳に風であるが、現世の愛のはかなさ、移ろいやすさを知っているパンダルスと、この物語が悲劇に終ることを最初から知らされている我々読者にとって、この言葉は、否めぬ真実である。そしてこれは、哲学の女神がボエチウスに告げる言葉でもある。

For in alle adversitee of fortune, the most unsely kinde of contrarious
fortune is to han ben weleful.

(II prose IV, 5-7)

このように、パンダルスの存在は、ボエチウスに対する哲学の女神の存在を思わせるものであるが、一たん逆運に見舞われると、彼は、運命とは

そういうものだと諦め、現実による慰めを見出そうとする。彼は、運命というものについてよく理解しているが、結局それは俗人の域を出ないのである。

悲嘆にくれて臥せっているトロイラスのもとへ、パンダルスは訪れる。これは、彼の最初の登場を思い出させるが、その時は、ちょうど、哲学の女神の、ポエチウスへの出現のようであったのに対して、この度は、彼は、トロイラスにどんな助力をすることもできない。運命について、悩み、問いかけるトロイラスに、応えてやることも、魂の慰めを見出してやることもできない。宮廷愛という、世俗の愛の掟にしばられているパンダルスは、トロイラスに古い恋の痛みを忘れるよう、忠告することしかできない。

The newe love out chaceth ofte the olde;

(IV 415)

From hasel-wode, ther Ioly Robin pleyde,
Shal come al that that thou abydest here,
Ye, fare-wel al the snow of ferne yere!

(V 1174-1176)

彼は逆境にあっては、もはや、トロイラスにとっての哲学の女神ではないのである。

さて、最後に、主人公であるトロイラスの運命に対する態度はどうか。彼は、3人のうちで唯1人、運命の抗し難い力を理解し、常に運命についての疑問を投げかけている人物である。そしてその魂は、ポエチウスが、哲学の女神との対話によって、徐々にその精神を高揚させていったように、だんだん成長していく。

恋愛を軽蔑していたトロイラスは、皮肉にも、クリセイデに一目惚れし、恋の病いに臥してしまう。パンダルスの助言と仲介で、クリセイデの愛を得たトロイラスは嬌慢さも消え、勇敢で立派な騎士になり、愛を讃える歌を歌う。

'Love, that of erthe and see hath governaunce,

Love, that his hestes hath in hevene hye,
Love, that with and holsom alliaunce
Halt peples ioyned, as him list hem gye,
Love, that knetteth lawe of companye,
And couples doth in vertu for to dwelle,
Bind this acord, that I have told and telle;

That that the world with feyth, which that is stable,
Dyverseth so his stoundes concordinge,
That elements that been so discordable
Holden a bond perpetuely duringe,
That Phebus mote his rosy day forth bringe,
And that the mone hath lordship over the nightes,
Al this doth Love; ay heried be his mightes!

That that the see, that gredey is to flowen,
Constreyneth to a certeyn ende so
His flodes, that so fersly they ne growen
To drenchen erthe and al for ever-mo:
And if that Love ought lete his brydelgo,
Al that now loveth a-sonder sholde lepe,
And lost were al, that Love halt now to-hepe.

So wolde god, that auctor is of kinde,
That, with his bond, Love of his vertu liste
To cerclen hertes alle, and faste binde,
That from his bond no wight the wey out wiste.
And hertes colde, hem wolde I that he twiste
To make hem love, and that hem leste ay rewe
On hertes sore, and kepe hem that ben trewe.'

(III 1744-1771)

この愛への讃歌は、「哲学の慰め」の中で、哲学の女神が、「聖なる愛の絆」(Holy Bond of Love)を讃える部分の、かなり忠実な引用である。(Book II, Metre VIII) このトロイラスの讃歌は、彼のクリセイデへの愛が、もはや、'amour' の範囲にとどまらず、崇高な、天上的な愛へと育ちつつあることを示している。そして、クリセイデとの別れという逆境を訪

れ、もはや、パンダルスの方も助言も及ばなくなった時、トロイラスは、運命について、神の摂理について、悩み、思索を重ねるのである。

'For al that comth, comth by necessitee;
Thus to be lorn, it is my destinee.

For detaynly, this wot I wel,' he seyde,
That for-sight of divyne purveyaunce
Hath seyn alwey me to for-gon Criseyde,
Sin god seeth every thing, out of doutaunce,
And hem desponeth, thourgh his ordenaunce,
In hir merytes sothly for to be,
As they shul comen by predestinee.

But nathelees, allas! whom shal I leve?
For ther ben grete clerkes many oon,
That destinee thourgh argumentes preve;
And som men seyn that nedely ther is noon;
But that free chois is yeven us everichoon.
O, welaway! so sleye arn clerkes olde,
That I not whos opinion I may holde.

(IV 958-973)

これはまさしくボエチウスの姿である。(Book V, Prose III, 7-71参照)
そしてボエチウスが、無実の罪で獄につながれ、訪れる死を待つ苦悩の試練を受けたように、トロイラスもまた、約束の日を過ぎてもトロイに帰らぬクリセイデを待ちつつ、希望と絶望の交錯する焦燥の日々を過し、その試練により、彼の精神は磨かれていく。

やがてついに、クリセイデの裏切りという冷酷な真実が明らかになり、トロイラスは、事の次第をパンダルスに告げて、こう付け加える。

... and I ne can nor may,
For al this world, with-in myn herte finde
To unloven yow a quarter of a day!

(V 1696-1698)

トロイラスとボエチウス

今やトロイラスは、激しい苦悩の末に、クリセイデに対し、愛憎を越えた人間愛を抱いているのである。彼は、もはや地上的な愛の世界にはいない。

これに応じてパンダルスは言う。

What shulde I seyn? I hate, y-wis, Criseyde!
And god wot, I wol hate hir evermore!

(V 1732-1733)

この言葉は、世俗の愛の世界に生きるパンダルスの限界を示している。チャーサーは、この2人の対照を、‘unloven’ (= to cease to love) と ‘hate’ という言葉を使うことによって、はっきりと表わしている。

トロイラスが死んだ時、彼の魂は天に昇る。ボエチウスの魂が天に昇ったと信じられていたように。(6) そしてチャーサーは、エピローグで、次のように若い読者に呼びかける。

O yonge fresshe folkes, he or she,
In which that love up groweth with your age,
Repeyrth hoom from worldly vanitee,
And of your herte up-casteth the visage
To thilke god that after his image
Yow made, and thinketh al nis but a fayre
This world, that passeth sone as floures fayre:

And loveth him, the which that right for love
Upon a cros, our soules for to beye,
First starf, and roos, and sit in hevене a-bove;
For he nil falsen no wight, dar I seye,
That wol his herte al hooly on him leye.
And sin he best to love is, and most meke,
What nedeth feyned loves for to seke?

(V 1835-1848)

これは、哲学の女神が「哲学の慰め」の最後の部分で、ボエチウスに、罪を避け、徳を尊び、心を正しい希望に向けて祈るように、と、励ます言葉

を思わせる。

Withstond thanne and eschue thou vyces; worshiþe and love thou
virtues; areys thy corage to rightful hopes; yilde thou humble preyeres
a-heigh.

(V Prose VI, 216-218)

そして、「トロイラス」も「哲学の慰め」も共に、‘Amen’ という祈りの言葉で終わる。

Ⅲ.

このように、主人公であるトロイラスに焦点をあてて、この作品を見ると、はっきりとボエチウスの影響を見出すことができる。

しかし、クリセイデとパンダルスという、精彩を放つ人間像は、「カンタベリー物語」に、明らかに見られる、チャーサーの人間愛溢れる現世肯定の原型をすでに成している。この魅力ある2人の人間像に、我々、現代の読者が心ひかれるのは当然であり、我々の関心は、常に、この2人に向けられている。この2人が登場しなくなった時点で、すでに、我々にとってのこの物語は終わっているのである。これが、おそらく、我々が物語とエピローグとの間に、異和感を覚える所以であろう。

しかし当時の読者にとっては、果して同じであったろうか。否。彼らの関心は、やはり主人公トロイラスであったろう。(7) 宮廷愛の掟通りに、恋に悩み、クリセイデとの別離、彼女の裏切りという苦悩の中で、人間愛、宗教的な愛に目覚めていくトロイラスと共に、当時の読者は、悩み、悲しみ、愛について、運命について考えたことだろう。トロイラスの死に際しての、彼の魂の救済は、当然されねばならなかった。クリセイデとパンダルスばかりに、心ひかれて、我々は、エピローグが、詩全体のトーンと合わないように感じるのであるが、主人公トロイラスに注目し、その魂の成長過程を見てゆくならば、この詩のトーンは、終始一貫しており、トロイラスの死と昇天、神への帰依を語るこのエピローグが、世俗の

愛を否定する、中世的、宗教的色調を持っていることも、自然に納得できよう。

注

- (1) '(Troilus and Criseyde) is the first novel, in the modern sense, that ever written in the world, and one of the best.' G. L. Kittredge, *Chaucer and His Poetry*, Harvard, 1967, p. 109.

'It is an elaborate psychological novel, instinct with humor, and passion, and human nature.' *Ibid.*, p. 112.

- (2) 'There have been divergent views of the so-called Epilogue to Chaucer's *Troilus*, ranging all the way from full acceptance to total denial of its appropriateness or consistency with the poem.' P. F. Baum, *Chaucer: A Critical Appreciation*, Duke Univ., 1958, p.143.

- (3) ここでは、チャーサー訳の「哲学の慰め」を参照している。

- (4) G. L. Kittredge, *op. cit.*, p. 27.

- (5) 「カンタベリー物語」の *Monk's Prologue* にも、悲劇についての、次のような定義が見られる。

Tragedie is to seyn a certeyn storie,
As olde bokes maken us memorie,
Of him that stood in greet prosperitee
And is y-fallen out of heigh degree
Into miserie, and endeth wrecchedly.

(B, 3163-3167)

- (6) ボエチウスは、キリスト教の聖人とされている。

- (7) 当時の人々が、トロイラス中心に、この物語を読んだことは、16世紀末に、スコットランドの Robert Henryson によって書かれた *The Testament of Cresseid* を見てもわかる。——トロイラスを裏切ったクリセイデは、やがてディオミーデにも捨てられ、ライを病む盲目の身となって道端で物乞いをしている。そこへトロイラスが通りかかり、変わり果てたかつての恋人とも知らず施しを与える。後で、それがトロイラスであったと聞かされたクリセイデは、罪を悔いた遺書を残して死ぬ。——トロイラスを裏切ったクリセイデには、因果応報の罰が下るのである。

(W. W. Skeat, *Supplement to the Works of Geoffrey Chaucer*, Vol. VII, pp. 327-346 参照)

なお、引用は W. W. Skeat ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed., Oxford に拠った。